

22 新潟県における肺癌手術治療の現状

井上 政昭・小池 輝明・渡辺 健寛
富樫 賢一・藤田 敦・土田 正則
青木 正・吉井 新平・林 純一
新潟呼吸器外科研究グループ

【背景および目的】新潟呼吸器外科研究グループでは肺癌手術治療の実態を把握する目的で肺癌手術患者登録を2001年から開始した。今回、2001年手術症例の予後について検討を行った。

【対象と方法】2001年1月から12月までに登録された558症例を対象とし、患者背景、治療内容と予後について検討を行った。

【結果】男性352例(58%)、女性206例(38%)、年齢20-89歳(平均66.8歳)。組織型はAd 388例、Sq 128例、La 13例、Sm 7例、Other 22例。病理病期はI A 299例、I B 121例、II A 167例、II B 40例、III A 47例、III B 21例、IV 13例であった。全症例の5年生存率は65.1%で、男性：56.2%、女性：80.4%であった。病理病期別5年生存率はI A：80.1%、I B：67.1%、II A：66.7%、II B：27.3%、III A：32.5%、III B：23.8%、IV：0.0%であり、組織型別5年生存率はAd：69.2%、Sq：53.0%、La：61.5%、Sm：27.3%であった。

【まとめ】新潟県での肺癌手術治療後の予後は全国平均と同等であった。

23 腹部大動脈瘤術後、二度の動脈瘤・小腸瘻をきたした1例

羽入 隆晃・蛭川 浩史・浦島 良典
清水 孝王・多田 哲也・春谷 重孝*
吉井 新平*・山本 和男*・杉本 努*
榊原 賢士*・三島 健人*・上原 彰史*
立川総合病院外科
同院 心臓血管外科*

症例は83歳、女性。平成7年にY型人工血管置換術を施行。平成18年1月に下血を認めて入院、経過観察中に大量下血、ショック状態となり緊急手術を施行した。左総腸骨動脈瘤切離断端に小腸瘻を認め、動脈瘤閉鎖・小腸部分切除術を施

行した。平成19年9月に再度下血を認め当科へ搬送され、腹部CTで右総腸骨動脈断端と小腸瘻を疑い緊急手術を施行した。右総腸骨動脈閉鎖部に小腸瘻を認め、動脈瘤閉鎖・小腸部分切除術を施行した。瘻孔内に動脈閉鎖したプレジレットがあり、異物による慢性的炎症が瘻孔形成の原因と考えられた。腹部大動脈瘤術後、二度にわたり動脈瘤・小腸瘻を形成したものの救命しえた稀な症例を経験したので報告する。

24 食道アカラシアに合併した進行食道癌の2切除例

森本 悠太・牧野 成人・小林 俊恵
須田 一暁・滝沢 一泰・小川 洋
西村 淳・河内 保之・新国 恵也
厚生連長岡中央総合病院外科

〔症例1〕51歳、男性。26年前に食道アカラシアと診断されるも定期的な治療は受けていなかった。S状型、拡張度Ⅲ度の食道アカラシアに合併した多発進行食道癌であり、右開胸下食道亜全摘術、2領域郭清を施行したが、前縦隔内リンパ節、胃管、肝、腸骨に再発を認め、術後1年11ヵ月で死亡した。

〔症例2〕50歳、男性。11年前に食道アカラシアと診断され手術を施行。S状型、拡張度Ⅰ度の食道アカラシアに合併した進行食道癌であり、右開胸下食道亜全摘術、2領域郭清施行。広範囲なリンパ節転移を認めた。

比較のまれな良性疾患である食道アカラシアに合併した食道癌2例を経験したが、アカラシアに対する手術後であっても発癌頻度は変わらないという報告もあり興味深い症例であった。

25 胃癌におけるセンチネルリンパ節の検討

中川 悟・梨本 篤・藪崎 裕
土屋 嘉昭・佐藤 信昭・瀧井 康公
野村 達也・神林智寿子・田中 乙雄
県立がんセンター新潟病院外科

【目的】T1, 2胃癌におけるセンチネルリンパ節